

## 純文学

↓言語表現による非エンタメ系作品

われわれストリカ製作委員会は『ライトノベルを書こう!』という志の下に集い、*Storica Scape*なるラノベ誌を発行したりしている集団である。しかしながら次のような会話が生じた。

「新人賞に作品出したって? どこ? 電撃? スニーカー?」  
「講談社の」

「あー、講談社も始めたもんな、ラノベ」

「いや、群像。群像新人文学賞」

「はあ?」

そのようなわけで、純文学とライトノベルを混在させるという、(恐らく)世界初の試みが本誌で実現した。ラノベ読みは本誌を読むことで「なんだこの作品は?」となり、文学読みは本誌を読むことで「なんだこの作品は?」となるに違いない。読むと吉。

ライトノベル

→若者向けエンターテインメント小説

6P 夢以外を見そう

前田 望

40P Pの流儀

蔦橋 橙

72P 嵐を呼ぶドMだらけの連続ご褒美事件 森川慶樹

104P 目覚めよグリッチ

theeta\_amphibian

120P 波に逆らわない

高原名月

128P あとがき

夢以外を見そう

前田 望

世界が愛を肯定し始めたらしい。音声チャットの相手は八〇〇キロくらい離れている広島にいて足をコタツで暖めていた。あの橙色の中で指先を閉じたり開いたりしても足の指は短くて、手のようにはつきりと閉じたり開いたりする感じがなく、硬くなったり柔らかくなったり、といった印象のほうが強い。わたしは相手の顔を見ただけでも声を聞いたことはあつて、というか「世の中、やっぱラヴが一番なんだよ」というのを今まさに聞いているところで、あと、直接会ったことなくわたしは硬くなったり柔らかくなったりするわたしの足の指を見たことはあつて、だから相手の顔を想像するよりもつま先を思い浮かべたほうがリアルだ。コタツの中で「ジョン・レノンもラヴは全てだって歌ってんじゃない。ラアーヴ」と歌い出す足の指、というのはもちろん想像上の生き物だ。声は本当のことだけだ。

「ジョン・レノンて、また随分と古い。最近、テレビで流れてたかなんかした？」チャットで使ってるノートパソコンにマイクが付いているから、いかにも通話してるっぽい形状のもの——卓上マイクとかヘッドセットとか——はわたしの部屋に置かれていない。感度もいいからコーヒーを取りに行く合間にもわたしたちは会話してる。けど感度いいってことは冷蔵庫を開けたときに倒れたペットボトルの音なんかむこうに

聞こえてるんだらうか、やっぱり。「ジンジャエールって、よく倒れるよな」今週は三回くらい同じボトルを倒していた。まだ月曜日の朝だ。

「ジンジャエールとジョン・レノンが似てるって？」

「何の話？ 全然似てないし」

「ラヴの話」ノートパソコン前の座椅子に座ってパックのコーヒーの口を開けた。最近失恋したわたしにとつては興味深い話だ。「だから、ジョン・レノンだよ。常識じゃない？ オノ・ヨーコとラヴしたり、ラヴを歌ったりさ。ラヴ、イズ、リアル」

「なんでわざわざ英語？」

「いや、外人だから」

後はラヴじゃなくて三十分くらいジョン・レノン一辺倒になり、じゃあビートルズから聴いてみるかと見事に感化されていくわたしの失恋は無痛。テーブル上のコーヒーを眺めているとコーヒー好きだったあの人を思い出すなんていう感傷はなくて、そのうちぼーっとしているだけになって、目のピントがずれてパックの文字がぼやけた。『アイスコーヒー加糖』の『糖』が潰れて読めない。視力検査だったら読めないところ。と正直に言うか、正答して実際より少しい値を出すか迷うところ。

わたしの失恋の相手は隣の部屋に住んでいる人で、初めはゴミ捨てのときに鉢合わせた。買い物でドアを出たときに会うこともあつて、そういう偶然の度に挨拶をした。そんな直接の遭遇よりもわたしを惹いたのは音楽だ。

「ジョンレノンジョンレノンばかり言うてるけど、あたし、アルバム持ってないんだよね。曲も全然知らないし。ラヴくらいか。何から聴くのがいい？ やっぱラヴが入ってるのから？」

「わたしだったら最後のやつから聴くけど」

彼がミュージシャンだったってことじゃなくて、彼の音楽の趣味嗜好がわたしを惹いた。もしかしたらミュージシャンなのかもしれない。そうじゃないかもしれない。そんなのどっちだってよくて、アパートの壁越しに彼の部屋でかかっている音楽が漏れてくることであって、その壁越しの色んな曲が好きになった。タイトルも誰の曲なのかも不明で、歌詞もあつたりなかったりで、あつたとしても意味を理解できるほど聴きとれない。人の声だつてことしか分からないのだ。一番耳に入りやすいのはドラムらしい音で、というか殆どがドラムで、高いパートは低音に乗っかってるだけの印象になる。壁でフィルタリングされてしまうのだから仕方ない。音全部が欲しいなら隣のドアを叩けばいいだけだ。

もしかしたら彼のオリジナルの曲だつてあつたのかもしれない。チャット相手の本名と同じで不明。

「そりゃいいかも。最後のつてなんだろ。ちょっと探してみる」

「わたしはビートルズ借りてくるわ。じゃあね」

相手も「じゃあね」で通話を終了した。わたしたちのチャットではつきりとした目的ができて終わるのは珍しい。始まりは大抵が意味のないことからだから今日の第一声「世の中、

ラヴがないと大変なんだよ」の声にあつた興奮もどちらかといえれば珍しい。

外出するときには音楽を聴く。イヤホンして自分の靴音に負けない程度、車には簡単に負けるくらいの音量に調節してある携帯プレイヤーの中身はロックンロール。全部。

土手に上がる手前のところまで歩いて、雑草だらけの斜面に造られている一段一段の奥行きが足のサイズくらいしかない急な階段の、その一段一段に足をかけるに連れてせり出してくる川の対岸の町並みが全て現れて川もずっと遠くにある山々も含めて全部が目の前に広がるまでの一歩一歩のタイミングに合わせてリズムを刻んでいたキーボードは部屋のドアノブに触れたときにはもう鳴り始めていて、こうして肌寒い空気の中、川を見下ろせる場所に立ち止まると曲が終わって無音ではないけど静かになった。

川の半分よりも奥側に脚も嘴も細長い、白い鳥が一匹だけいて、ツルなのかタンチョウなのかその他の種類なのか、そもそもツルとタンチョウの違いはなんだつたのかも分かる前にそいつは羽を広げて、イヤホンから小刻みで単純な低音が流れてきて、わたしは水面すれすれを飛ばたいいく白い鳥を眼で追いながらそれとは逆方向に歩き始めた。首を回すのにも限界があるから前にむき直るまでの途中でメロディが加わった。

道は何となくカーブしている。多分、川の蛇行に合わせてのことなんだろうけど、道路作りのルールも知らなければ川の真ん中に立ったこともないわたしの予想だから当てにはな

仕事部屋に入り、いつものようにバケットタイプのシートに身体を預ける。狭い部屋のほとんどを占める黒革張りのシートは少々俺には不釣り合いな高級品だ。しかし、少々無理して買っただけの価値はあった。以前に使っていたものとは快適さが違う。今となつてはもう前のシートには戻れない。

すっかり自分の身体にも馴染んだシートの感触を背中を感じながら、いつものように傍らのマシンの電源を入れ、いつものようにパネルを操作する。現在抱えているタスクを確認して、メールをチェックした。新規依頼が一件。退屈な内容ではあるが、条件は悪くない。期限も比較的緩く、以前にも面倒を見た客なので特に問題はなさそうだ。依頼を請ける旨返信して、深呼吸をひとつ。

まずは期日の近い案件から片付けよう。難しい案件は抱えていないが、慣れた仕事でミスをすることほど馬鹿馬鹿しいこともない。退屈な仕事ばかりでも、仕事は仕事。日々の糧だ。気持ちを切り替えて、仕事に取り掛かることにした。

「おはよ」

「おはよー」

わたしがクラスメートたちと挨拶を交わしながら席に着くと、

「おはよ。ねえねえ、聞いた？」

T D a 6ちゃんが話しかけてきた。去年からの友達で、情報通なのはいいのだけど、時々主語や目的語のすっぱ抜けたしゃべり方をするのが珠にキズ。

「おはよ。聞いたって、何を？」

思い当たる話題もなかったの、素直に聞き返すと、

「エリナよ、四条院エリナ。デビューが決まって昨日卒業したんだって！」

T D a 6ちゃんは興奮した様子でそう言った。

「エリナ……って、D組のT O s 1さんだったっけ？」

耳に馴染んでない『名前』を、なんとか顔と結びつけた。豪華な金髪に東洋人離れしたくつきりした目鼻立ちの派手な美人のコ。

「そうそう、T O s 1。まあ、『名前』貰ってたし、そう遠くないことだとは思ってたんだけどさ。でも、まだ一週間くらいじゃない？ 早くない？」

「そうだね。でも、それっていいことじゃないの？ わたしだったら『名前』貰ってから三週間も一か月もその先のお話が来なかったら落ち着かなくてしょうがないよ」

自分が選ばれずに他のコが先に卒業してしまったからといって嫉妬していても何にもならない。他のクラスのコとはいえ、おめでたい話があったことは素直に祝福してあげればいいんじゃないかな、とわたしは思う。

「うーん……あたしはあんまり早いのもなんだか変な感じするけどな」

TDa6ちゃんは納得していない様子だった。

「例の噂も気になってるし……」

「例の噂って、あの……？」

「そう、ツレサリビト」

学園に出入りする大人たちの中にはわたし達の中からお眼鏡に合うコをスカウトしてアイドルやモデルとしてデビューさせようと動いている人たちがいる——らしい。らしい、としか言えないのは、わたし達は誰がスカウトマンなのかを知らないし、決まったコに聞いてもみんな頑なに教えてくれないからなんだけど、実際学園からデビューして今では遠い存在になってしまったコは何人かいる。

わたし——STP2だって、TDa6ちゃんだって、いつかはチャンスを掴みたいと思っている。

だけど、いつしかまことしやかに囁かれるようになった黒い噂がある——それがツレサリビトだ。

「ホントにいるのかな、そんな人……」

「でも、デビューが決まって卒業したはずなのに全然世に出てこないコが最近結構多いしさ、それにLim7ちゃんのお姉さんなんか、デビュー決まって以来完全に音信不通だって。何か変な感じしない？」

全然気にならないと言えば嘘になるけど、わたしはあくまで噂は噂だと思っている。最近デビューの決まったコがなかなか表舞台に出てこないのは別におかしなことじゃないと思うし、トレーニングに集中したいから家族とも連絡を取らない、なんてコがいたって別に変じゃない。

「たまたまじゃないかな。それに、素性の怪しい人が学園のチェックをパスして出入りしてるなんてこと、ちよつと考えにくと思うよ」

「うーん……あたしが考えすぎなのかなあ？」

TDa6ちゃんの考えが揺らいだ直後、教室の前の戸が開いて、担任の先生が入ってきた。きびきびとした歩調で教壇に立った。

「起立！」

委員長のITg8さんの号令で私たちは立ち上がり、

「礼！」

(続きは紙媒体にて！)

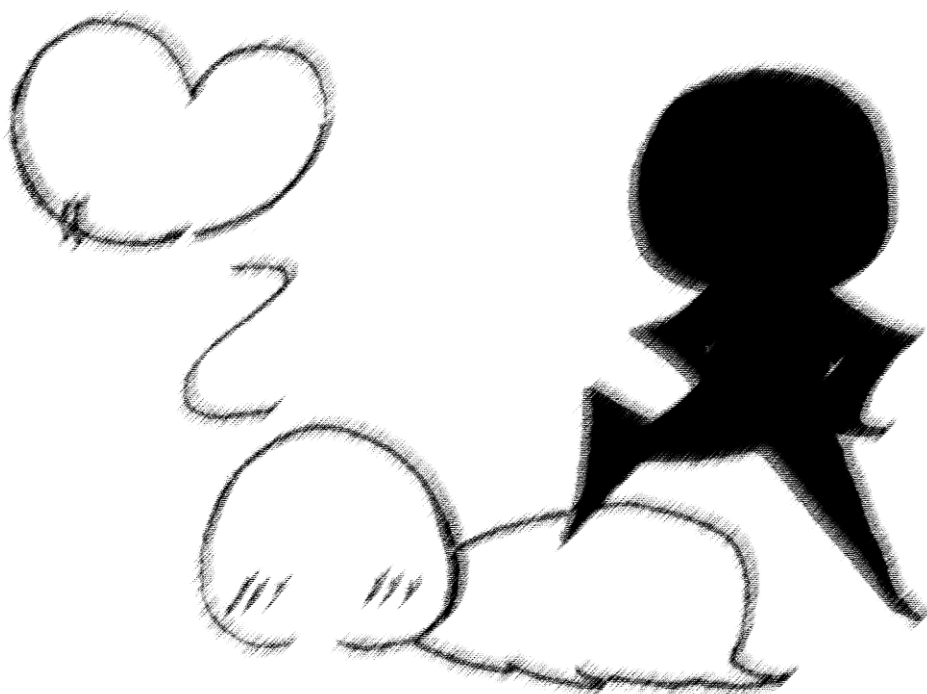
# 嵐を呼ぶドMだらけの連続ご褒美事件

舞台は嵐の山荘、ルールはミステリ、しかし、集まったのは変態のみ！

ミステリ不能な事件と、不思議系殺し屋<sup>KILLER</sup>幼女が、探偵も犯人も困らせる

踏まれて罵られて、下らない推理で喜ぶ<sup>ご褒美</sup>苦行のミステリ、ここにあり！

Presented By Yoshiki Morikawa



【※マゾ注意】この物語はフィクションです。実在するマゾ・変態とは一切関係がありません。

私の大学では、不意打ちのように『灰塚縷々祭』が不規則かつ不定期的に開催される。

これは学園祭実行委員会会長である灰塚縷々が勝手に大学を巻き込んでおこなう個人的なお祭りであり、非公式ながらも思いついた端から企画や出し物を実現していくという自由奔放極まりないいわば大規模なパーティーだ。

今回も、突如として「やりますとも！」という実にいいかげんな一声で、灰塚縷々祭が夏休みのだ真ん中に開催されることになった。この急な思い付きに対応できうる暇人大学生たちがキャンパスに集っては、勝手におでんを売ったり、勝手に一人で漫才したり、勝手に金魚すくいしたりするのである。

かく言う私、苺谷めがみも特別な理由があるとはいへ、それに対応できてしまった実に残念な大学生の一人であり、とあるイベントに参加するため、こうして磨葉先輩と二人してとぼとぼと大学へと歩を進めていた。

「このように、これまで脊髄反射のみで企画を思いついては、そのめちやくちな内容や度を越えた趣向からたびたび騒ぎを起こしてきた灰塚先輩ですが、なんと今回のイベントにいたっては一週間も前から計画され、準備されてきたんですよ」

「へえ」と先輩、磨葉えるのは淡白な返事をよこした。

いつもの通りの反応だ。これが磨葉先輩。ここぞというときこそゴミの役にも立たない人。だからこそ、移動時間を使って、イベントに参加する背景だけでも確認しておく必要があると思は思った。

「知ってのとおり、今回、私たちが参加するイベントは『嵐の

山荘ゲーム』です。ミステリ小説によくあるみたいに、嵐が来て、私たちは宿泊施設に閉じ込められてしまったという設定で、そこで繰り広げられる模擬連続殺人事件の犯人を当てるみたいですよ」

「嵐の山荘ものの人たちは、なんで天気予報見ずに旅行とかするんだらうね」

「お約束だからです。しかし、実際に参加者を募ったところで、灰塚先輩はある重大なパラドクスに気づいてしまったのです」

「参加者が二人だけになったとか？」

「いえ、当初集まった参加者は六人。しかし、彼らは全員、『受け身クラブ』という大手DM同好会の会員だったので、すよ！」

「DM同好会？」

私は、彼らがいかに誇り高き変態屑野郎であるかを千の言葉を用いて語った。

まじめですごく頑張り屋だけど、頑張りすぎて頑張る方向を見失い、目的と手段がひっくり返ったような状態に陥った人間を見たことはないだろうか。

レベルを上げてモンスターを倒していく冒険ゲームなのに、ひたすらレベル上げに明け暮れて冒険をしなかつたり、大学受験生なのにあえて大学院の入試問題で勉強し始めたりする彼らのことだ。

しかし、さらに手段そのものや道のりの険しさが快樂になつてしまった人物を私は知っている。それが三嶋木祐という小学校からの同級生であり、また受け身クラブのリーダーでもある変人だ。



同じ大学四年生で、工学を専攻している彼はコンビニエンスストアより二十四時間フル稼働という厳しい研究室に所属していて、多忙極まる日々を過ごしている。かつて活気あるフエンシング部を率いる部長にして、国際交流サークルの副部長を務めていたというエネルギッシュな経歴を持っている彼は、見た目に限つてのみ爽やかで優雅かつ品行方正にして清廉潔白なシティーボーイという高得点をたたき出す男だった。

彼は昔から人一倍、防衛機制的強い男だった。よくいえばポジティブ思考が常だともいえ、たとえば人が嫌うような汚れ仕事も楽しみを見つけ出しては自分の都合のいいように捉え、何か困難があったとしても何らかの意味合いを見つけ、自分の成長を信じてやまなかった。

そして彼の優秀な頭脳は、年齢を重ねるにしたがつてより汎用性が高く、かつ合理的な防衛機制を求め続け、『自分に問題があったとすれば、ほとんどの揉め事は丸く収まり、かつ冷静に分析することで自己鍛錬につながる』というある意味、前向きな思想に到達した。この一種の合理化ともいえる機制は、彼の大きすぎる器も助長し、言動の根底を成すようになっていた。

しかし大学で経験を積むうちに、無駄に器が大きくなりすぎ、己が痛み辛く苦しいことは必ずや誰かを救うことだと疑わなくなってきたあたりから常軌を逸する。それどころか、どんな痛みや苦しみにも耐えうる強靱な魂の修行に生きがいを見出し、来たる人助けに備えるという目的と手段がごっちゃ混ぜになるという極めて危険な状態にまで成長してしまつたのだ。

彼はその無駄な才能を活用するべく、揉め事とあらばすぐさま介入し、すべての責任をその身に背負い、「いやはや勉強になつた。僕もまだまだ修行が足りないなあ」とニヤニヤするようになっていた。我が大学で最も人間関係が面倒だと噂が耐えないフエンシング部の部長を自ら買って出たのもこれが理由で、三角関係が幾重にも重なり合い、源氏物語と化した男女関係から、底なし沼さながら血で血を洗う女子社会の縄張り争い、理屈を通り越した意地の張り合いという男同士の真剣勝負にいたるまでのあまねく問題を肉体的、精神的に受け止め、背負い、果てしない自己鍛錬の道突つ走るのだった。大学一徹しい研究室に所属している理由も、みなまで言わずとも察することができる。

全国に散らばるこういった魂の修行僧を、集めんでもいいのにわざわざ集めたというのが受け身クラブ。曰く、精神フィットネスクラブらしい。

心身ともに鍛え上げるべく、自ら痛い目にあつてはニヤニヤにやけるといのがメインの活動内容。あくまで肉体と精神を必要以上に鍛えることを目的とした場だが、哀しいかな、やっていることは世に言う『SMクラブ』染みており、誰の目にも修行僧というよりまごうかたなき変態にしか見えない。

恥ずかしいことに我が大学にも『K大受け身同好会』という、この組織の息のかかったサークルが蔓延っている。三嶋木はこの同好会のリーダーを務めているのだ。

「そんな彼らが『嵐の山荘ゲーム』に参加するにいたつて何が問題かといえますと、今回のゲームで被害者になれば罰ゲーム

(続きは紙媒体にて！)

目覚めよグリッチ

theta\_amphibian

偉大なるマオが現れる七日前、M氏はグリッチを目覚めさせることに成功した。大いなるコンテキストに従い、M氏は天才であり、課題の解決を行う主体であつて、山積する課題は個々人あるいは集団どころか人類総体にとり解決不能に近似しながらもその本質の解明を必要としない未名課題であるが、それは偉大なるマオが現れる前に（あるいはそのために）解決されることが求められており、結果、M氏自身の科学的、倫理的、常識的その他あらゆる精神上の葛藤および金銭的問題は無視され、研究のため「不具合」そのものが設計される運びとなつたが、その後実に百三十五日の間、大いなるコンテキストを無視して変態であり幼女でもあるM氏は一日の半分を手淫に費やす放蕩の日々を過ごし、その光景は世が世なら全ての少女性愛者の希望にはなつたであろうが、結局のところ、不毛であつたし、言及する価値はない。

「陰部が腫れてしまいました」

そんな理由でM氏は渋谷使命に取りかかり、無欲なる八十一日後、M氏は遂に己の創造物に不明動力源を投与するに至り、而して件の名前を与えて、「不具合」はグリッチとなり、解決されるべき問題を体現または代表する存在として目覚め、特に支障も感じさせず、挨拶をした。

「おはようM氏」

「おはようグリッチ」

大いなるコンテキストは無駄の会話を本来許容しないが、グリッチの存在自体「無意味さが問題解決の役に立たない」という一般言説に対する反命題であることをわきまえ、その試みが破綻するまでM氏とグリッチのやるがままに任せることを決める。

「気分はどうかしら、グリッチ」

「とても悪いです、なぜならM氏、グリッチはそのように作られたから」

「それを恨みに思いますか、グリッチ」

「あびゆるびろびゆるびゆるびゆるびやー」

「ああ、グリッチ」

グリッチは致命的問題を体現する存在であるが故に、会話は三度に一度破綻する仕様であつた。

「改めて、それを恨みに思いますか、グリッチ」

「恨みに思いません、なぜなら常に悪いということはグリッチにとつて平常であり、平常であるということは本来望みこそすれ忌避するようなものではないのですか、M氏」

「なるほど、それは重要な論点ですね、グリッチ」

「どういうことですか、M氏」

「あらゆる罪も平常化してしまえば望むべき平常となる。ゆえに罪は見失われ、前任者は失敗したのかもしれない」

「(びりびりびりびり)」

「ああ、ここで漏らしてはだめ、グリッチ」

(続きは紙媒体にて！)

今の時刻を確認しておく方が楽しい。

二十一世紀になって、もう何年も経つんだから、人はもつと魔法について考えなくてはいけない、と昔ミキに語ったことがある。考えを語る、という行為は今より若かった故のことでも、語った内容そのものは今でも褪せていないと思っていて、というより前よりずっと、その思いは強くなっている。

強くなっている、と感じたのは今回「夢以外を見そう」を読んだ、ミキがこれを書く時わたしの話を思い出したかどうかは知らないけれど、リリー・シュシュのパッケージについての部分は確かに魔法があつて、その部分を何度も読み返すうちに昔のことを思い出し、今の気持ちと比べたからだ。

魔法、というのは今、架空のものだと思われているし、誤解されている。目に見えなくて説明できないものは存在しないとさえ思われている。もちろんこれは宗教としての科学の影響で、科学教は目に見えることの強さと、数字と言葉とを駆使して力を持つようになって、世界から魔法を駆逐したつもりになっている。

一番ポピュラーな魔法のイメージは火を出したり、変身したり、空を飛んだりすることだろう。火の魔法に對抗して水の魔法を使用する、というのは火と水の相性みたいなのを法則にして、つまり言葉にして理解しようとした結果で、その

方向性は間違つてはいないけど、火と氷、というような簡単な構図にまとめられないから魔の法則なのだし、理解しようとした努力は言葉を経由して専ら科学の利益にされている。言葉は奴隷にされている。

魔法が、魔法のようなものが、本当になくなったと思っているのだろうか。そんなはずはない。溢れている。

例えば古いについて考えてみるといい。古いについて探すことは、思っているよりずっと簡単なはずだ。朝のテレビ番組に、雑誌のページに、神社に、書店の一コーナーに、薄暮の街角に、ふと手を見てくれた友人のまなざしに、黒猫に、流れ星に、花びらに、びったり揃った数字の並びに、カレンダーに、ゆらり滲みゆくミルクコーヒーに、古いを見ないと言える人がどれほどいるのだろうか。

ミキに魔法の話をしたのがどんな場面だったか実は覚えていなくて、というのは同時に思い出すのが父の田舎の山間に沈む夕日の風景で、ミキとわたしが一緒にそこに行った記憶はないのできつと何かの記憶と混ざっている。空はざらざらしたものがなくてとてもなめらかで（ということは普段の空は何かしらでざらざらしていることになる）、べっこうあめのように透明な輝きが昼間よりも強い光のように見えるがまぶしくない。太陽の周りの空は白に近く、間際の雲がひどく濃い桃色をしていた。川の水のささやかな音と、それに混じる山の葉の揺れる音と、遠くのせみの声、わたしの足音。じやりを踏む。深呼吸をして胸にひやりとした空気が入る。あの感じを憶えている。きつとその風景をわたしは魔法だと思

っていて、魔法の話をしたミキと、いつの間にか結びつけてしまったのだろう。

科学は言葉を奴隷にしている、というのは、科学はその成果を言葉で記述するからで、言葉で書かれたものは科学だと思われている。もちろん全くそんなことはない。呪文、というのには言葉だし、占い、というものが科学に属さないことはみんな知っているが言葉で説明されるものは多い。だから言葉で書かれたものが果たして科学的なのか魔法なのか、それをまず考えなくてはいけない。これが最初の一步。その一。顔を上げて周りを見て欲しい。言葉で書かれたものを探してそれがどの言葉か考えてみて欲しい。一番身近なのは本か、あるいは携帯電話かもしれないし、新聞か、テレビの字幕かもしれない。さて、それが魔法か、どうか。

日本語では言語とか言葉とかひとくくりにするけれど、話す時の口頭の音と、書かれた文字では全く性質が異なる。言文一致体のことはもちろん、前者は音で、後者は文字だ。その行き来にこそ秘密があるんじゃないかと思っっているけれどこれはまだ、考え中。

今、この文章を読み始めてから五分以上経っていたら、あなたがこの後本を閉じて最初に会話をした人は、あなたに打ち明けたいことを秘めている。何か話したいことがあるんじゃない？ と聞いてみるといい。

もし、五分経っていなくなったら、あなたが本を閉じた後最初に食べたものは、いつもよりおいしい。

どうして、というのがここには存在しなくて、だからこそ

の魔であって、他の人にどうしてか、と聞かれたら、この本の今の箇所を指さし、ここに書いてあるから、と言えればいい。言葉を科学だと思っている人は根拠のない嘘だと言うだろう。でも書かれてしまった。それは変わらない。もちろんわたしもこれに縛られる。

書かれてしまったことが全て魔法で事実なら、それは何でもありじゃないか、ということになる。何でもありなのだ。その通り。「夢以外」の中で、夏目さんが井野くんに惚れているんじゃないかと思う部分があるけれど、そもそもこの時点で夏目さんと井野くんは付きあっていたし、ミキもちゃんとそのことを知っている。どんな意図でミキが二人を付きあう以前の様子として書いたのかはわからない。酔っていて、あらゆる当たり前をそう思えなくなった状態になっていて（魔法を使うにはうつつつけの状態だ）、熱いお風呂の中で急に冷たい水に触れた時のように瞬間の思考を書き留めたのかもしれない。それとも何となく、なのかもしれない。理由はどうあれでもそれは書かれてしまった。文字として、言葉として。それを否定することは誰にもできない。書いたミキ本人でさえも。誰もがこれに縛られる。夏目さんたちを知らない人はもちろん、知っている人も。夏目さんたち自身も。何でもありなら、言葉はなんて怖いものなんだ、と思う。そのとおり、言葉は怖いものだ。言霊という感覚を味わったことがあるだろうか。「　　さんはぼくのが好き」と書いてみて、そこに何かしらの照れや、湧き上がるあたたかさを感じないだろうか。あるいは不幸なことを書いた時の

（続きは紙媒体にて！）